

せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福社会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成23年 9月 第127号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

認知症の人と新薬、そして住まい

最近、認知症の治療薬として3つの薬が発売され、大きな関心を呼んでいます。外国では既に販売されていた薬であり、直接輸入して使用していた方々もありますが、日本国内ではアリセプト1つであったところに、3つの新薬が発売され、治療に当る医師と患者側の双方が、大きな期待を掛けています。

そして一方で、高齢末期ではなく、40代～50代～60代に発症する若年認知症にも大きな関心が寄せられています。職業や社会活動の継続が難しくなり、経済的な問題が発生し、近隣の人々の困惑と家庭内の介護の問題も複雑に絡み、新たな社会問題ともなってきました。

少し前には、若年の認知症は進行が速く、数年で最期を迎える、と言われていましたが、最近では十数年以上も継続して介護している方々が多数見受けられます。しかしどの薬も、進行を遅らせる事は可能でも、治すことは出来ない、という処は共通しています。

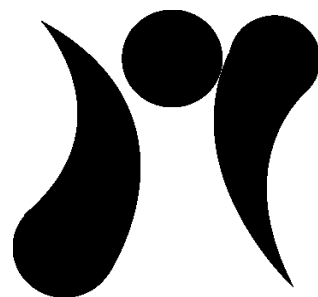
かつて、アメリカのレーガン元大統領がアルツハイマーだと判った時、ナンシー夫人は『スローグッバイ』と言われました。ゆっくりではあるが、確実に来る別れのときに備える覚悟を宣言した言葉であったように思います。

新薬を含めて多様な使用方法が可能になり、治療効果への期待も大きくなりますが、同時に、確実に訪れる最期への準備もしなければならない、という複雑な状況の中に、ご本人もご家族も長期間、身を置くことになります。

大阪大学特任教授の西川勝氏は、『認知症の人は老いの先輩』と言い、浦島太郎の玉手箱に詰っていた白煙をどう理解するか、と問われます。

最近、特養やグループホームで最期を迎えた方を看取る中で、老いた身体は自らの生命活動を完了する準備をしている、と強く感じます。老いは、穏やかに生命活動を完了し、安らかに人生を締め括る為の準備期間。そして同時に、遺伝子では伝わらないものを次の世代に伝える、バトンタッチのゾーン。そのように考えると、バトンタッチが上手く出来ていないのではないかと気がかりになります。バトンタッチのお手伝いが、介護の役割、と肝に銘じています。

(次ページへつづく)



(前ページのつづき)

遺伝子では伝わらないもの、思想や文化や人間性を次の世代に引継いでバトンタッチが完了します。認知症になっても、感性や感覚や感情は最期まで残る、と言われる。生活経験で培った感性や感覚を発揮し、遺伝子情報に添って懸命に生きる姿に、手渡すバトンが潜んでいるように感じます。

最期に近づくとつれ、余力が少なくなるにつれ、懸命さが目立ちます。その懸命な生命活動に触れて、他者の心が動きます。その心の動きこそが、引継がれるバトンであり、バトンタッチは受取る人との共同作業だと思います。

若いながらも老いの途に踏み込んだ若年認知症の人には、治療を目指しながらも同時に、最期に向けた懸命な生命活動を支える感性や感覚を、生活の中で磨く必要があります。様々な行為が出来なくなっていく不安に対して、生活者として適度に折り合う力が、今の生活の中で培う感性や感覚に潜んでいます。

転んでも身体のもつ微妙なバランス感覚が受身を誘い、大怪我を防ぎます。不安感の中にも、過去の様々な困難な経験で身に付けた適度な折り合い方を、自分で見つけ出します。自分のバランス感覚で行動を決め、自分の折り合い方で居場所を決める暮らしの中で、自立した主体性のある生活者として人生を締め括る、主役としての毅然とした態度と顔つきに尊厳が備わります。

玉手箱の白煙は、幻想の世界から決別し、現実の生活の中で、主体性をもって懸命に生きる、主役の途を指し示しているように思います。

認知症の進行により、或いは薬の効き具合や過剰な介護によっては、ご本人の身体的なバランスを取る力が減退し、不安や混乱と折り合う力を失い、ご家族や近隣の人々との関係が悪化する場合があります。其処に、医療者や介護者や地域の人との調整が重要になり、本人を中心に置くケアマネジメントが世界中で重要視される所以となっています。

例え認知症になったとしても、自立した主体性をもつ生活者として、地域社会の一員として、人生を締め括る為に、西欧諸国ではグループホームが用意されました。10人～20人程度の適度な規模のコミュニティの中で暮らすとき、ご本人のバランス感覚や生活感覚が最大限に活かしている事に気付き、介護施設としてではなく、住宅として提供されてきました。そして、国民の感じる幸福度が非常に高い社会を実現しています。

高齢者には、生活を包む適度な規模のコミュニティに身を置き、他者の視線を意識し、生活感を感じる居住空間の中で、自分の感性と感覚を最大限に活かして懸命に生き、穏やかにバトンタッチを完了して欲しい、と願います。

一戸建ての住宅では、生活を包む適度な規模のコミュニティが成立せず、他者の視線や生活感のある空間を継続して提供できず、医療や介護への依存度が強くなって、バトンタッチのゾーンが生活空間から遠ざかっていきます。

今計画する『サービス付き高齢者向け住宅』は、最良のバトンタッチをお手伝いする為の、ハードとソフトを提供したい、と願い設計しています。

グループホームではないが、グループホームケアが目指した効果が最大限に発揮される高齢者向け住宅。バトンタッチを支える適切なケアマネジメント。24時間対応の訪問介護。必要時の訪問看護。夫々の居住者とその関係者の間に思想と文化と人間性の行き交うコミュニティを実現し、幸福度の高い社会への道標になりたい、と願います。

三日坊主

人間の体は本当に不思議だ。よく出来ているとしか言いようがない。体は周りの環境に対応してどう動いているだろうか、ちょっと見回してみても、たとえば暑くなれば汗が出て喉が渇き、水分を要求する。また、寒くなれば、体を震わせて熱を発生させようとする。お腹がすけば、何かを食べたくなったり、腹を鳴らして空腹を知らせている等々、こんな反応を四六時中抜かりなくやってくれているのだ。

また、人間の感情と行動との関係においてもいろいろなものがあり、たとえば、人はおかしければ笑い、悲しければ泣くのはごく普通のことであるが、よくよく観察すれば、人はおかしいから笑うのではなく、笑うからおかしいのだ、あるいは、人は悲しいから泣くのではなく、泣くから悲しいのだという人もいる。

これらの言葉は、心療内科の診察においてよく使われているが、本当はどちらが先でどちらが後なのか、いろいろ思いは巡らされるが、結局は確たる解答は得難い。しかし、体が動く原理は、反射が先で、その刺激が脳に伝わり、体が動くことになるのであろう。

計画を作っても、それを煩わしく思ったり、窮屈だと思ったりする人は、それに飽きやすく、継続は力なりをうっとうしく思うかも知れないが、多くの人は誰の脳でもみな同じで、みんな飽きっぽいように思われる。

人間の脳はすぐ感動しなくなるようになっていく。すごくきれいなクリスタルグラスも、2回目になると感動は薄れ、3回目になるとなおさら感動はしなくなるものだ。こんなことを思い巡らしていた時、わが先輩が教えてくれた粹な言葉を思い出した。すなわちそれは、「どんなにきれいな花嫁でも十日も経てば飽きてくるし、どんなに不細工な花嫁でも二十日もすれば馴れてくる。」というのである。要するに脳は1回見るとマンネリ化するようになっていくようだ。だから三日坊主であり、それが普通の人間なのだ。

このように、誰の脳でも三日坊主だが、「イチロー」はこれを克服するために四つのポイントを抑えている。その四つとは、(1)とにかく体を動かす。たとえば英会話の勉強でも、解らなくてもその教室に行くこと。とにかく体を持っていくことだ。腹筋運動をしようとしたのに三日坊主の虫が出てきた時でも、とにかくマットを開いて腹筋運動の体制に入るのだ。(2) 退屈でもそれができたら、ご褒美をもらうようにするのだ。(3) そして、いつもと違うことをする。それは友達をつくることだ。その友達も少しやる気のある友達がベストだ。(4) なりきる。自分は達成したのだと脳に思わせるような行動をとる。

やる気がなくなった時、気力はなくなっているけど、先の四つの行動をとれば、自然につながってゆくものだ。つまり、三日坊主ではなくなっていると思うのだがどうだろうか。

せいりょう園待機者状況 <平成23年9月14日現在>

○入所判定済み者 407名 (グループの内訳)

Iグループ…129名 IIグループ…160名 IIIグループ…107名

○入所判定済み者の現在状況

在宅158名/特別養護老人ホーム入所中15名/医療機関入院中108名

老人保健施設入所中88名/ケアハウス入居中5名

グループホーム入居中17名/所在不明5名

○辞退その他 せいりょう園入所2名/他施設入所1名/辞退1名/死去7名





『地域福祉・介護事業への提案』

①介護保険制度は、予防重視型システムから大きく転換し、高齢者が老いと死の主役として『自立した生活主体者として老い、尊厳をもって死に臨む』姿を支える仕組み、と考えるべきです。

②地域包括ケアシステムは、人の老いと死を支えて、次世代の生きるエネルギーにつながる、自然と調和した持続可能な社会を実現する為の仕組みとして、新たな視点で構築する事を提起します。大震災後の復興に向かう今こそ、生活を見直し、街と世間を変革する、大きなチャンスです。

③地域包括支援センターは、老いと死の舞台に相応しい地域を造り、自然の摂理に添って人生を締め括る営みを支え、『次の世代に希望をつなぐネットワーク』の拠点として再出発を図る必要があります。設置・運営について現行制度の法文を離れ、看取りと葬儀など思想・宗教的な背景と、医療と介護の社会制度と、地域の街づくりについての、広汎な議論が出発点です。

④介護は、主役として老いを生き、誇りをもって死に臨む高齢者にとって生活に必要な力を見極め、それを引き出す専門性が求められます。老いに抵抗して力を保持しようと努める事よりも、老いに伴い機能が低下する不安と『適度に折り合う安心感』を養う事、が最も重要です。其処に介護の専門性が生じます。専門的な手法の一つであるスウェーデンのタクティールケアは、安心ホルモンの分泌を促進する手法と言われます。

⑤予防を重視して機能の維持を図っても、老いと死は無くならず、多くの高齢者が死の前に右往左往し、最期を病院で迎える結果につながります。機能低下による不安に向き合い、適度な処で折り合う力を養う為の手助けが、自立支援です。自分の力を養うのは自分であり、其処に公的資金を投入し制度的に支援するのは、自立を妨げる結果を招き、資金と人材を浪費します。

⑥老いは喪失の過程です。知性も理性も体力も社会的な役割も失う不安の中で、主役の暮らしを支えるのは、遺伝子情報と、生活経験で培った感性と感覚です。炊事や洗濯など生活を実感できる空間に身を置く時、音や匂いが感覚を刺激して『安心感』が生じ、心の内で不安と折り合う力が働きます。生活感の希薄な空間で、知性や理性や体力を維持しようとする積極的なアプローチは、気を紛らわせて、ご本人の感性や感覚を不要とし、やがては感覚が鈍って不安がつり、折り合う力を失います。

⑦特養やデイサービスなど多くの介護事業でリハビリやカラオケなど、機能の維持と回復を目指して積極的なアプローチが行われています。短期的には効果が現れたように見えますが、長期的にはもっと機能が低下し、それを何度も繰り返し、やがては効果がなくなり、最期を迎えます。その最期を生活の主役として迎える為、ケアマネジメントが導入されましたが、現実には、主役から降ろして病院へ送り込んでいます。介護予防事業と介護予防ケアマネジメントは、主役の老いと死を支えません。予防にケアマネジメントを適用するのは、日本のみです。

⑧老いは受容の連続です。障害を受容し、死を受容したお年寄り、不快感から開放されて今生きている事を嬉しく思い、死を恐れずに今の暮らしを楽しみます。彼らは、疑似体験の延長上では推察できない、独自の価値観と感覚で生きる人であり、在るが

ままを受け入れ、見守り、生活の主役として尊重します。例え認知症であれ、要介護5であれ、社会の一員として、自らの行為の主役として、結果についての責任を負う存在です。法律行為の責任主体としての義務は免じられても、自らの命と暮らしへの責任は果たすべきです。認知症の人が外出して交通事故に合うと、施設の管理責任を問う声が上がりますが、管理責任の前に、ご本人の主役として果たすべき義務と責任を認める事が、自立支援の原点です。イギリスのトム・キットウッド氏は『パーソンセンタードケア』で、認知症の人が引き受けるべき妥当なリスクがある事を、前提としています。行政への事故報告やリスクマネジメントへの検討が必要です。

⑨老いを受容し自立した要介護者は、不快感や不安感から開放され、変身して、新たな感覚と価値観で生きています。健常者に疑似体験の延長上で介護を理解させる研修や、早期発見と治療を教える認知症サポーター養成講座は、老いの本質から外れて、保護策や医療依存を強める惧れがあります。

⑩今回の津波で、助け合おうとして、助けられずに悔やんでいる人がいます。『津波でんでんこ』。先人は津波の時は、生半可な助け合いよりも、ばらばらに逃げろ、と教えます。厳しい自然の営みの中を生きる逞しい生命力を、自らの最期を受容れる営みを通して、お年よりは伝えていきます。人として最も創造性の豊かな営みを、次の世代につなぐ仕組みとして、地域包括ケアシステムを構築したい、と願います。

せいりょう園 渋谷 哲

～ 男性介護者の為の料理教室のご案内 ～

日時：10月12日(水) 13:30～15:00

費用：食材費の実費負担(1,000円～1,500円・料理は持ち帰り)

申込：せいりょう園(079)421-7156 / (079)424-3433



～開設記念コンサート～



第21回
ロンドンアンサンブル
コンサート

日時：平成23年12月14日(水)

開場18:00 開演18:30

会場：リパティかこがわ2F

加古川市野口町長砂95-2

交通：JR加古川駅か東加古川駅より

かこバス「長砂公民館前」

下車すぐ

駐車場も有ります

料金：4,500円

(休憩時間にドリンク
サービスがあります。)



介護についてみんなで語ろう会

テーマ「認知症サポーター養成講座」

せいりょう園老人介護支援センター
社会福祉士 吉田 知一

今年も「認知症サポーター養成講座」を開催しました。

認知症サポーター養成講座とは、認知症の人と家族への応援者である認知症サポーターを養成する講座です。講座を修了すると、認知症を支援するサポーターの「目印」として、オレンジ色のブレスレット「オレンジリング」が渡されます。自治体が中心となって、認知症になっても安心して暮らすことの出来るまちづくりを目指しています。

現在の日本の高齢化率は23%となり「超高齢社会」を迎えている状況にあります。加古川市の高齢化率も平成22年1月末の統計では20%を超えており、徐々に高齢化が進んでいる状態です。85歳以上の高齢者の4人に1人は認知症の症状があるといわれていますが、その数は今後、増えていくことになります。

老人ホームの待機者が増え、せいりょう園でも400人の待機者がいらっしゃいます。認知症で介護が必要な状態となった場合でも自宅で生活されている方々がたくさんいらっしゃいます。認知症を患っている方が、過ごしやすい地域になるにはどうすれば良いか、皆さんと語りました。

○認知症を知ろう

まずは、認知症という病気を正しく理解する必要があると思います。脳は、私たちのあらゆる活動をコントロールしている司令塔です。それがうまく働かなければ、精神活動も身体活動もスムーズに運ばなくなります。認知症とは、いろいろな原因で脳の細胞が死んでしまったり、働きが悪くなったためにさまざまな障害が起こり、生活するうえで支障が出ている状態（およそ6ヵ月以上継続）を指します。

認知症を引き起こす病気のうち、もっとも多いのは、脳の神経細胞がゆっくりと死んでいく「変性疾患」と呼ばれる病気です。アルツハイマー病、前頭・側頭型認知症、レビー小体病などがこの「変性疾患」にあたります。続いて多いのが、脳梗塞、脳出血、脳動脈硬化などのために、神経の細胞に栄養や酸素が行き渡らなくなり、その結果その部分の神経細胞が死んだり、神経のネットワークが壊れてしまう脳血管性認知症です。



健康な脳



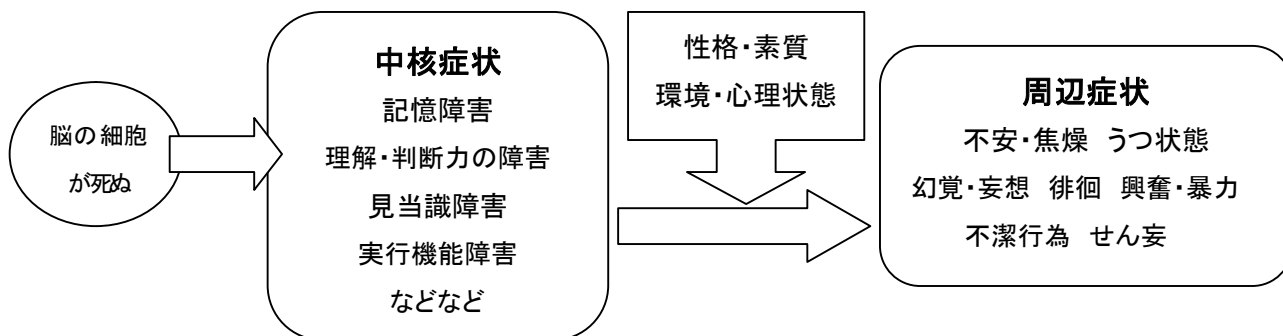
脳の細胞がびまん性に死んで脳が萎縮する
(アルツハイマー病などの変性疾患)



血管が詰まって一部の細胞が死ぬ
(脳血管性認知症)

○主な症状とは

認知症の症状には脳の細胞が死んでしまうことによって直接起こる「中核症状」と、その中核症状に対して本人の性格や生活環境、心の状態が関係することで起こる「周辺症状」があります。



この内、周辺症状については、まわりの方の接し方や環境によって症状に変化があることがあります。また、まわりの受け止め方次第で症状を「問題行動」として捉えてしまう場合もあります。私たちもそうですが、相手を馬鹿にした口調や尊厳を傷つけるような接し方をすると、興奮されたり症状が強くなってしまふことがあります。声かけひとつで落ち着かれる場合もあります。

○認知症の予防と病気についての考え方

[早期診断、早期治療]

早期診断、早期治療は認知症においても大切なことです。しかし、残念ながら現代の医療では認知症は治ることはありません。この受け入れがたい事実を本人、家族は受け入れる必要があります。例え認知症であっても、人生を締め括る営みには創造性と尊厳が宿ります。その上で、認知症の進行を遅らせたり、周辺症状を抑える治療を行います。大切なことは、早い段階で病気であることを理解し、認知症の正しい情報と接し方を早く知ることです。

[どう接したら良いか]

尊厳を大事にした対応をしましょう。認知症になっても感情やその人らしさは保たれています。その方自身を受け止め、本人の思いや生活に寄り添い、本人にとっての尊厳について考えることが大切です。

感想

サポーターには特別なことは求めません。認知症であるということを受け入れ、ただ見守ってもらいたいのです。しかし、「ただ見守る」ということが実は一番難しいことなのです。火の不始末や徘徊などの症状により、地域の中で住み続けることが出来ない場合があり、認知症や障害を持つ方の人権が問われているように思います。認知症の方、障害のある方、介護が必要な方が、地域の中で懸命に生活しチャレンジする姿に学ぶ事の出来る地域であることが、地域住民であるサポーター一人一人の役割なのだと思います。

ケアハウス等空き情報

<平成23年9月14日現在>

《ケアハウス》

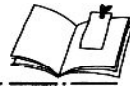
・ 恵泉	: 1人部屋若干	・ 第二ケアハウス恵泉	: 1人部屋若干
	: 2人部屋若干	・ めぐみ苑	: 1人部屋3室
・ 汐ノ御津	: 1人部屋1室	・ あさなぎ	: 1人部屋3室
・ サリットひまわり園	: 1人部屋2室		: 2人部屋1室
・ ケアハウスゼリア	: 1人部屋2室	・ 青山苑	: 1人部屋3室
	: 2人部屋1室	・	: 2人部屋2室
・ サライ御立	: 1人部屋1室	・ せいりょう園	: 1人部屋1室

《グループホーム》 せいりょう園 1室

《バリアフリーマンション》 リバティかこがわ 3室



[問合せ先] せいりょう園介護相談室 Tel(079)421-7156/(079)424-3433



講師 真宗大谷派 光念寺
本多 正尚 ご住職

デイサービス 谷澤 高明

今月の仏教講話は真宗大谷派光念寺、本多正尚ご住職に来て頂いた。冒頭先日の水害で亡くなられた犠牲者のご冥福を祈り、四方山話の後、地球の歴史に講話は移っていく。地球の歴史は46億年。生命体の歴史は40億年。では人間の歴史は？地球の歴史をカレンダーにしてみると、人間はどの辺で出現するのか？ご住職はいつものようにぐいぐいと聞き手の関心を高めていかれる。「カレンダーを1枚1枚めくっていきます。3月、4月、春を過ぎ7月、8月、9月、夏も過ぎ秋に移ります。10月、11月、12月。冬になりました。カレンダーはあと1枚。『日めくり』に変えます。」結局人間の誕生は12月31日午後11時59分頃だそうです。今や我が世の春を謳歌している人間ですが、地球の歴史の中ではこの程度の期間なのです。ここで心配されるのは、これまで地球を征服してきた『モノ』は必ず減ってきているということです。人間はどうなるのでしょうか？大丈夫でしょうか？只、人間にとっての救いは『困ったものだ！』『自分の力で何とか出来ないか？』と考えることができます。人間は親の手間暇かけて、愛情を持って育てられてきました。それだから人間になれるんです。それが『人間道』として続いて来ています。自らに恥じる事のないように、他の人に対しても恥じる事のないように生きたいと願います。『恥じる』ということをお教界では『慚愧(ざんぎ)』と言い、涅槃経(ねはんきょう)には、「慚愧無きものは『人』とは為さず、名付けて『畜生』と為す。：自覚と反省こそが人間にとって一番素晴らしい行為である。それも自分勝手にするのではなく、仏・法・僧の三宝を基準に自らがみつめられていくのである。」とあります。自分の間違いは認めることなく棚上げにして、相手を非難することに明け暮れる毎日ではないか？最近の事件で顕著な事は、加害者に反省が無い、少ないということではないか？反省が無いということは人間の皮を被った畜生である。これ

は生きていく為の人間としての『ルール』を持たなくなってしまったのではないだろうか？かつて『人生50年』と言われてきたが、人間の寿命が延び、3世代が同時に生きているのは人間だけだ。そこには長く生きたものの価値がきっとあるのではないだろうか。そこに知恵があるのではないか。

最後に2通の手紙を紹介された。いずれも『死者からの手紙』とでも言おうか！最初は20代の娘を病気で亡くした両親に、半年ほど経った頃、亡くなった娘さんからの手紙が来た。生前娘さんが書いて少し両親の気持ちが落ち着いた頃投函するように友人に頼んでいたものであった。『びっくりさせてごめんなさい！友達に頼んでいたんです。お金一杯使わせてすみませんでした。先立つ不幸をお許し下さい。私はとても幸せでした。ありがとう。待っています。ゆっくり、ゆっくり、しっかり生きて来て下さいね』。もう1通は自分の病気を知った母親が幼い子どもに残した手紙です。子どもは母親のない悲しみから非行に走り、拳銃の果てに自暴自棄になり「お母さん」とつぶやいた時、親戚の人がその手紙を子どもに見せました。走り書きのような、歌のようなものでした。

『坊やよ よく聞け 母ちゃんの 死んでも死なれぬ 魂は 坊やを残して ただ一人遠いところへ 行かりようか 姿は野辺にかくるとも 心は坊やの胸の内 坊やの母ちゃん呼ぶ声は 母ちゃん坊やを呼ぶ声よ 坊やの体は母ちゃんの たった一つの形見ゆえ 大事に丈夫に気をつけて 親の誠生きようよ。』(いい人になるんだよ。なっておくれ。) いずれも自分の大事な人に対する優しい心づかい、思いやりが満ち溢れんばかりです。「自分に何が出来るか？いつも考えて生きていきたいものです。それこそが長く生きたものの務めではないでしょうか。1年の内に一つでも出来ればいいですね。」穏やかな言葉で締めくくられました。有難うございました。